

第 33 回全日本皆生トライアスロン大会に出場して

折り返して 28 年 トライアスロンのワンダー・ワールド

理事長 渡邊 仁

タイムペナルティ（招集遅刻）の 3 分間が解けて、ラン・コースに飛び出す。2013 年 7 月 14 日、午後 2 時頃、第 33 回全日本皆生トライアスロン大会の 2 種目目、ラン 42 キロが始まった。

*

今回、ここ数年、非常勤で講義している神戸女学院大学での経験か、活字文化に関わり続けてきた数十年の軌跡か、はたまた、35 歳を人生折り返しと勝手に思い込んで精力を注ぎ続けてきたトライアスロンの世界かと、何を書こうかと迷った。

7 月、鳥取県米子の皆生温泉で行われる、日本で最も古い歴史を持つトライアスロン大会に出場が決まっていたこともあって、このスポーツについての来し方行く末を綴ってみることにする。しばし、おつきあいいただきたい。

*

スイム 1 時間、バイク 6 時間を経て、私にバトン [リストバンド] は渡された。例年、皆生の暑さは特別で、灼熱の地獄ラン、と言われているのだが、今年は、幸運なことに曇天模様となり直接的なダメージから、少し逃れることができた。

まずはムリのないペースで皆生の街を駆け抜けていく。この大会は道路交通規制をかけていないので、ほとんど歩道を走る。ほぼ弱視に近い私は、段差に注意しないと蹴躓づいて転倒、なんてことになりかねない。

2、3 キロ毎にあるエイドステーション（以下 AS）に辿り着けば、水をかぶり、スイカやオレンジ、梅干しなどを補給し、再び走り出す。

冬のマラソンとは違い、タイムを狙うのではなく、AS での補給を十数回も繰り返せば、おのずとフィニッシュラインに到達する、という割り切り方で走る。

*

一九八五年、皆生トライアスロンに続けと、町おこし・村おこしの一環として、ロング・ディスタンス（以下、LD）での二大会が日本に出現した。四月に沖縄・宮古島で、六月には滋賀・長浜を中心に琵琶湖周辺で、早朝スタートして、十数時間をかけてフィニッシュするという、トライアスロンの初期イメージ（よく鉄人レースと言われる）を作り上げ

た大会だ。それ故、この年をもってトライアスロン元年と称するのもあながち間違っていない。

偶然にも、音楽を通じた友人が電通の仕事で、びわ湖大会の大会運営事務局に携わっていた。「変わりもんがいっぱい来るおもしろいイベント」だと、吹聴してまわっていたのだが、それにひっかかったのが私、である。

同じ年、編集・広告企画制作プロから独立して事務所を構え、子どもたちも物心がつきはじめ、会員制スポーツクラブが人工島に出現、そこで女房殿のクロールを見様見真似で泳ぎはじめ、走ることが生活の中心だった高校時代の残影が蘇ったのか、自転車さえあれば、三つできるじゃないかと、果てしない未知のトライアスロンへ一歩踏み出したのである。

後押ししたのは、フォークシンガー・高石ともやのトライアスロン賛歌や外国人タレントのはしり、イーデス・ハンソンの「歩く生活」であり、さらには山の民を取り扱った五木寛之の『風の王国』（1985年）であり、「人生70年、35歳はターニングポイント」という設定がなぜか身にしみたのか、村上春樹の短編『プールサイド』（初出1983年 『回転木馬のデッド・ヒート』所収 1985年）もその一つだった。

*

足は動いている。個人部門の選手は大山山麓140キロのバイクで足を使っているのだから、軽快に走るというわけにはいかない。相対的にこちらがどんどん抜いていく。するとリズムが乱れにくくなる。レース前はキロ6分ペースで、と考えていたのだが、10キロの通過が55分。ムリはしていないので、頗る堅調とあっていい。

ASで高校生・中学性たちの「頑張っ」コールと笑顔に応えるべく、しっかりスイカをいただき、一息入れて、また空冷と水冷でびしょ濡れになりながら、折り返し点のある境港をめざす。初めてなのでどんなコースなのかわからないが、折り返せばおよそ見当がつくものだ。20キロ地点を1時間50分。いいぞ、イーブンで走れている。

大会は道交法遵守のため、幾たびとなく、赤信号で立ち止まらざるをえない。しかしこれも、ストレスと考えず、つかの間の休息をもらったと考え、フォームの乱れが大きくなるように、ひねりを入れて足をクロスさせないように、二軸走法（ナンバ歩行のイメージ）を心がけ、膝を前に出すことに意識を向ける。

*

曲がりなりにも陸上競技出身だったので、トライアスロンに出会ったときの、精神標語「Finisher is a winner」は忘れられない。トップ選手もビリの選手も、完走すればみな勝利者だという感覚は、競技者という実力だけで評価されがちな世界に育った者としては、そ

の「仲間意識」や「エイジグループ」（五歳刻み）への温かくも尊敬のまなざしも併せ持つ姿勢が非常に好ましく感じられたのである。酒場の冗談から生まれたトライアスロンならでは、の「ゆるさ」が素敵だった。

同感者はここにもいた。

《後からくる選手との差がじゅうぶんあいているのを確かめてから、ゴール前で走るのをちょっと中断して、応援の観客となごやかに交歓している場面が、今回のオリンピックでもしばしば見受けられた。そんなのんきなことをする競技はちょっとない》（『sydney!』村上春樹 2001年）

ここ数年、ノーベル文学賞に最も近いと言われるハルキ・ムラカミが触れているように、長丁場を乗り越えてきたのだから、最後くらい楽しくやったっていいじゃないか、というのがトライアスロン、なのである。

1986年8月、アイアンマンジャパン in びわ湖大会で、世界選手権大会の権利を獲得した私は、10月、ハワイ島コナの聖地に立った。そして13時間かけてレースを終え、晴れてアイアンマンの称号を与えられた。このときの4桁のレースナンバーは、未だに私のメモリアル・ナンバーになっている。フィニッシュの後、ボランティアに支えられ、マッサージベッドで味わったフロズン・ヨーグルトは、まさに天上の味、至福の味だった。絶対に忘れられない。

＊

久しぶりにレースに参加している自分の身体が歓んでいる。ASでのスイカやオレンジがなによりのエネルギーに転化している、と思い込む。

応援する人たちで鈴なりだった境港の折り返し地点をにこやかに終え、しっかりとリズムをきざんでいた24キロ付近のこと。

実は左足裏拇指丘辺りにマメができており、その痛みに、後18kmも耐えられるかどうかを不安に感じ始めていたところだった。滑り止め付きのソックスが誤算だった。繊維の摩擦熱が水冷を超えていたのだろう。

突然、前からバイク・マーシャル（移動審判）が叫んで、すれ違う。元日本代表ナショナルコーチの八尾常任理事が審判で参加しているのだ。「ワタナベさん、走れてるよ！！」これに意を強くしたのは当然である。マメができていても走れているのなら、それが急速に悪化しないように、足裏全体着地を意識すればいい。彼のその一言で、気を取り直して、フィニッシュへと向かっていく。

蒸し暑さに負けないよう、空冷・水冷を繰り返し、体温の上昇を抑止し、血管にミネラルを補給して、知らず知らずのペースダウンにならないように、リズムを整える。復路の

坂も難なく乗り越えた。

*

LDであれば、朝の3時半に起きて、7時のスタートを迎え、私のような並の選手であれば、およそ半日をかけて、日没から夕闇に溶け込む頃にフィニッシュを迎える。

過去、「レース中は何を考えているのですか？」という質問が多く寄せられてきた。答えて曰く、「考えているつもりはないのですが、やはり、さまざまな想念が次から次へと流れる雲のように過ぎていくのです」と答える。「それって、どういうことなんでしょう」、と言われても、解析できるはずもない。「12時間は、哲学する時間なのです」なんて、言ってもいいのかな、という冗談は通用しない、か！

ただ、1964年東京オリンピックでのアベベ・ビキラが走っているときの、なにものにも動じない能面のような表情、そして、1986年アイアンマン・ハワイでのアワードバンケットで映されたレース写真・連続スライドの中の一枚、初老の白人女性トライアスリートが、スイム・スタート時に、目を閉じ、両手をしっかり前で握り合わせ、神への祈りを捧げている表情は、今でも私の脳裏から離れることはない。

LDをしている間は、「なぜ、こんなキツイことを自身に課しているのだろう」という自問を常に繰り返すことで、知らず知らずのうちに、「サムシング・グレート」なものが自身を突き動かしているのではないか、と思わざるをえなくなっている自身に気づく。

*

西陽が疲れた身体をジリジリと焦がす。それでも、27キロ付近から数キロは、松林がいい木陰をつくってくれる。いよいよ、残りが一桁のキロ数になってくる。しかし、左足のマメはいまだに痛みを発信し続けている。なんとか、フィニッシュまで持ってくれと、あえてフォームの揺れを少なくするように、手の振りと足の運びを中庸に保つようにリラックス、リラックスとつぶやいて、意識させる。身体の悲鳴を脳が抑えようとする。

街中に戻ってくれば、残りは数キロなので、なんとかなる。歩道の凹凸に足をとられないように、足下に視線を集中する。同じようなペースで走っている人もいるのだが、十数回にわたって止められる信号でペースを崩されるのか、いつのまにか、後方に消えていく。

*

ASで息を吹き返す。まさしく補給基地である。中高生が私達のために、水、スポーツドリンク、コーラ、バナナ、オレンジ、スイカ、梅干し、塩などを用意して、次から次へとやってくる選手たちにサーブしてくれる。米子市民、約4300名（主催者発表）のボランティアがサポートしてくれるトライアスロン。LDの大会は、精神面・物量面での地元をあげ

での支援がなければ長続きはしない。

全国の地方が疲弊しているというこの時代、前日の開会式・競技説明会で、主催者は半ば冗談のように、「協賛がきつくなっていますので、ASでの食べ物・飲み物が十分でないかもしれませんが、ご容赦ください。上位の選手たちは、後に続く選手のことも考えて、適量の摂取をお願いします」と訴えていた。これが現実だ。

*

米子市中の歩道橋を渡ってしまえば、いよいよ終盤だ。ASでの止まる時間が増えたのか、時計を確かめると、どうやら4時間15分位でフィニッシュできそうだ。最後のASで、最後のスイカを十分味わって、残りの距離を確認し、リズムをつくっていく。フィニッシュゲートのある陸上競技場はまだか、まだか、早く視界に入ってこいよ、と念じながら疎水沿いの歩道を走る。

ところが実はこの歩道がくせ者だった。もうすぐだと思うのに、一向に競技場が見えてこない。すぐに競技場があるような雰囲気だったので、とても長く感じてしまう。せいぜい2キロ位なのだろうが、これが初コースの心理的負担の結果だ。

ようやくJTU審判団の姿が見えてきた。見知った顔が見え、声をかけてくれる。そこが競技場の入り口だった。夕暮れなので、オールウエザー型のトラックがカクテル光線に映えている。約300mのフィニッシュロード。シンダーやアンツーカー(en tout cas)の時代に走っていた我々にとって、新しいオールウエザーのトラックを走るのは、とても気持ちがいい。

最後の直線で、仲間の「チームひょうとら君」(兵庫県協会の役員チーム、合計年齢179歳)のメンバーを探す。一緒にフィニッシュを飾るのだ。スイムの河合常任理事はすぐに来た。ところが、バイクの大原常任理事がいない。ランのコースで、私を捜しに行ったのだという。つまり、私が予定より、40分も早く帰って来てしまったのだ。

仕方がないので二人でHTAの旗を持って笑顔でフィニッシュ。実走4時間17分(ペナルティで公式には21分)、全員で11時間22分の旅は充実して幕を閉じた。しみじみと嬉しいフィニッシュであった。

*

昨年のHTA設立25周年記念パーティで出た冗談、「理事長、皆生を三人で走ろうよ！今から準備すれば間に合うよ！」は、見事に実を結んだのである。大原常任理事の積極的な働きかけがなければこの体験は実現しなかった。久しぶりにLDの大会の雰囲気を選手として味わうことができた。この満足感は何ものにも代え難い。スイム・バイク・ラン、それぞれが動いて共同の仕事を成し遂げた。リレーの良さをあらためて思い知ることになっ

たのである。

にこにこ顔の大原常任理事曰く、「クセになりそうやなあ！」

＊

《僕らにとってもっとも大事なものごとは、ほとんどの場合、目には見えない（しかし心では感じられる）何かなのだ。そして本当に価値のあるものごとは往々にして、効率の悪い行為としてしか獲得できないものなのだ。たとえむなしい行為であったとしても、それは決して愚かしい行為ではないはずだ。僕はそう考える。実感として、そして経験則として。》（『走ることについて語るときに僕の語ること』村上春樹 2007年）

＊

選手の立場だけではなく、競技運営の立場も併せて、トライアスロンに関わってきた28年。風変わりなスポーツ・イベントから、オリンピック競技にもなったトライアスロン。短い距離からLD、さらにはデュアスロン、アクアスロン、ウインター・トライアスロンまで、多彩なステージが用意されるようになったのは、市民レベルでの健康志向の延長線上にトライアスロンが見えるからだと思っている。

トライアスロンは、学校体育という土壌から育ったのではなく、ホモルーデンス的なゆとりから生まれてきた。子ども達にとって、身体を全体的に使っていく遊びが消えていくなかで、トライアスロンのような複合競技は、複雑な現代社会のなかで、遊びにとって代わる受け皿としての性質を持っている。

トライアスロンという競技に特化することがすべてではない。特定の競技に純化されたトップエリートは別にして、ふだんのトレーニングのパートとして、どのような組み合わせでもいいから、トライアスロンを取り入れることは、決してマイナスになることはない。それゆえに、我々は、ずっと21世紀を代表するスポーツになる、と信じてここまでやってきた。

我々は、さらなる生涯スポーツとして、ごく自然に出入りができるスポーツとして、あらゆる自然環境のなかで、人間が自然と戯れる気持ちよさと、身体への優しいまなざしを忘れずに、トライアスロンをというステージにおいて、身体とこころのバランスがとれた人間像をこれからも追求していきたい。まだまだ、やるべきことは山積みなのである。

○この原稿は、『書評』2013年秋号（通巻140号）に掲載されたものです。編集発行元である関西大学生生活協同組合『書評』編集委員会の了解をえて、転載いたしました。